

日本ロレンス協会ニュースレター No. 41

2021年8月28日

日本ロレンス協会会长 田部井 世志子
副会長 石原 浩澄

会員の皆さんにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、今年度の日本ロレンス協会第52回大会は、本来であれば6月19日（土）、20日（日）に高知県立大学永国寺キャンパスで開催する予定でしたが、コロナ禍の中、Zoomを使用したオンラインでのライヴ開催となりました。研究発表も1名の応募があり、企画もシンポジウムとワークショップ、それぞれ一つずつ盛り込むことができ、とても充実したものとなりました。

まず19日は大江公樹氏による「*Lady Chatterley's Lover* における『純粋』の探求」という題名の研究発表から幕開けしました。作品中で何度も使用されている「純粋」という言葉に目を向け、これまでのロレンス研究ではあまり焦点を当てられることのなかったこの概念が、ロレンスにとっていかに重要であるのかを宗教、とりわけ会衆派との関連で示されました。

引き続き「アフター・ロレンス」——共通文化にむけて」という題名で開催されたシンポジウムでは、まず井出達郎氏がアメリカの作家ヘンリー・ミラーの『北回帰線』を分析することで、ロレンスから繋がっていく「共通文化」の興味深い一側面を示されました。次に、廣瀬絵美氏はイギリスの音楽民俗学者A・L・ロイドの主導したフォークリヴァイヴァル運動の紹介をしつつ、ロレンスに繋がる炭坑歌と「共通文化」というテーマで論じられました。続く木下誠氏は、著書『モダンムーヴメントのD・H・ロレンス——デザインの20世紀／帝国空間／共有するアート』における、晩年のロレンスのエッセイのコンテクストの掘り下げを出発点として、「共通文化」としてのロレンス文学の可能性を探されました。最後にコメンテーターの浅井雅志氏による論点の整理と登壇者への質問を通してフロアも巻き込む白熱した議論となり、とても有意義なシンポジウムとなりました。

2日目のワークショップでは、「今、ロレンスにどうアプローチできるか」という題名のもと、3つのグループに分かれ、3人の講師陣がそれぞれ「授業」形式で現役の学生たちと共にロレンスのテクストを読み味わうという、日本ロレンス協会の長い歴史の中で初めての試みがなされました。中林正身氏は『チャタレー夫人の恋人』を、岩井学氏は『虹』を、高村峰生氏は詩「ハミングバード」をテクストに扱われました。グループセッションが終わった後、全体会を開き、それぞれのグループでの実践を振り返り、グループセッションを見学した会員との質疑応答を行いました。今回のワークショップを通して、ロレンス文学の発信方法を共有でき、またロレンス文学の意義と可能性を改めて見出しうる貴重な時

間となりました。高知県立大学をはじめ、甲南大学、相模女子大学、早稲田大学、関西学院大学から参加・協力してくださった学生の皆さんには心から感謝申し上げます。このように今回は、協会外の方々を含む数多くの参加者があり、充実した大会となりました。大会の様子等については協会ホームページ（以下 HP）の「全国大会」→「52回レポート」をご覧ください。

次に、総会での審議および決定事項をご報告いたします。

議題

1. 第 53 回大会について（開催校、日程、企画について）

本来であれば今回の大会は高知県立大学において開催する予定でしたが、今年もコロナ禍の中、対面での開催は見合わせ、上記の通り、オンラインでのライヴ開催となりました。3 年続けて開催校の準備をしていただくのはとても申し訳ないのですが、鳥飼真人氏が来年度の開催についてもご快諾くださいましたので、第 53 回大会は以下の要領で開催する予定です。

開催校： 高知県立大学永国寺キャンパス

日程： 2022 年 6 月 18 日（土）・19 日（日）

企画などは未定です。皆さん、発表はもちろん、シンポジウム、ワークショップの企画に奮ってご応募ください。

2. 決算報告、予算案（2020 年度会計決算報告と 2021 年度予算案）

会計の鳥飼氏からの決算報告と予算の提案後、諸戸樹一氏と麻生えりか氏からの会計監査報告もなされ、承認されました。

その他、報告、話題提供等

1. 学会誌の扱い

「ニュースレター第 40 号」でお知らせしました通り、『D.H.ロレンス研究』第 31 号（2021）の出版については諸々の理由により見合わせましたが、それに代わるものとして昨年度の活動報告を兼ねて「『D.H.ロレンス研究』第 31 号刊行に代えて」と題した文書を HP にアップしました。会員の皆さんには既に郵送させていただいております。

『D.H.ロレンス研究』の次号は先例に従い「第 31-32 号」の合併号になります。

2. 会員数について

8 月 23 日現在の会員数は 96 名となっており、昨年度からは、3 名の退会、3 名の新入会となります。

3. 国際学会について

来年度は以下の学会が開催されます。皆さま、奮ってご参加ください。

* 35th INTERNATIONAL D. H. LAWRENCE CONFERENCE (7-9 April 2022),

Paris, Université Paris Nanterre: "D. H. LAWRENCE, AN ISLANDER AND THE SEA"
Call for Papers の情報も出ています。詳しくは以下の D. H. Lawrence Society of North America の HP のサイトでご確認ください。(<http://dhlsna.bravesites.com/>)

4. 各種制度のお知らせ

・終身会員制度

定年あるいは病気などの理由で退職する会員に、退職後も長く本協会に留まつていただけることを奨励するための制度。(<http://dhlsj.jp/dl/syushin.pdf>)

・大会研究発表のための助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない会員に対して、本協会大会で研究発表（シンポジウム講師等の担当を含む）をする際の費用の一部を助成するための制度。(<http://dhlsj.jp/dl/josei.pdf>)

・和田静雄海外研究発表助成制度

専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない若手会員に対して、海外の学会で D・H・ロレンスに関する研究発表を行う際の費用の一部を助成するための制度。(<http://dhlsj.jp/society.html>)

以上、ご報告いたします。

* * * * *

コロナ禍の中、他の多くの学会においても、この1年でオンラインでの大会開催が一般化する中、本協会でも対面が無理であれば、どうしてもライブ開催は実現させようということになりました。オンラインでの大会開催であったために、Zoomの利用方法はじめ、大会運営にあたっての段取り等々、様々な問題点等を検討いたしました。初めての試みでどうなることかと気を揉みつつも、会員の皆さまの温かい励ましや、執行部の皆さまのご尽力・ご協力のお陰で2日間の大会を滞りなく無事終了することができました。最後になりましたが、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

それでは皆さま、来年こそは6月に高知県立大学でお会いできることを祈念しています。